「父はどう思われているか」常に

自見英子参院議員・医師（46）　自見庄三郎・元衆院議員の娘

自見英子参院議員＝東京都千代田区

勤務医だった父、庄三郎が旧福岡４区から自民党の衆院議員になったのは私が小１の時でした。自宅は以前から選挙区内で、以来私は「政治家の娘」になりました。誰かを見ると「この人、父をどう思っているかな」といつも考えてしまう。父のポスターの目の部分に画びょうを刺され、落書きされ、本当に嫌でした。母は常に紺の服にローヒールで、絶対にブランド物なんて着られない。

一方、選挙の時の事務所はお祭りみたいで好きでした。にぎやかで２、３年に１度会うおじさんたちがいて。学校とは別の楽しい居場所でした。首都圏の大学に進学し、父の議員宿舎に一緒に住みました。20歳になったら、自然と選挙の手伝いです。母と一緒に企業訪問。そういうものだと思っていました。

郵政選挙で、郵政民営化に反対した父は「刺客」を差し向けられました。私が研修医だった時です。仲良くしていた地方議員があっという間に離れていき、父は落選しました。22年住んでいた宿舎を３日で退去しなければならず、悲しむ間もなく引っ越し作業です。その後、半年ぶりに父に会ったら、髪が真っ白になり、20㌔太ってやさぐれていました。落選した政治家とはつらいものです。権力は残酷だと思いました。

父は2007年の参院選で全国が単位の比例区に出馬し、当選しました。父にとって最後の議員活動だと思い、勤務医をしながら秘書をしました。父の引退後、医師会から、同じ参院の比例区に出馬しないかと話が。政治の大変さを知っているので最初は断りましたが、医師として日本の皆保険制度はすばらしいと実感しており、それを維持するよう政治家として活動したいという思いもありました。親には相談せずに決心し、16年に初当選しました。

政治の世界に入ると、初めはすごく窮屈で。それまで男女差別を感じたことはありませんでしたが、政界は昭和の男子体育会のような世界でした。でも、若い仲間と「こども庁」創設の提言をして実現するなど、政策を動かすダイナミズムの面白さも感じています。

（聞き手・編集委員　秋山訓子）